

高等学校における第二外国語教育の現状と必要性 —大学に進学しない生徒の第二外国語学習—

寺尾 美登里

1. はじめに

国際化が進む昨今、留学生も含め、外国にルーツを持つ生徒を受け持った経験がある教員も多くいるであろう。筆者自身がそうだが、そういった外国にルーツを持つ生徒はたとえば10年前と比べ、増えているように思う。このような状況の中、日本における外国語教育、特に英語以外の外国語教育、並びに異文化理解のための教育は旧態依然としており、国際的に見て、結果的に遅れをとってしまっているように思えてしかたがない。アジアに例をとるならば、中国や韓国では高校時代から英語だけでなく、日本語をはじめとして、第二外国語教育がもうすでに当たり前のことのように行われており、未だに英語第一主義である日本は、複数言語教育という点で先の二国に対して遅れをとっていると言えよう。こうした状況を踏まえ、現在の日本の高校における第二外国語教育の現状と必要性について述べたい。筆者自身はスペイン語教育に携わっているため、スペイン語教育について特化した内容になることを、あらかじめ断っておく。また、この報告は2017年6月18日に関西大学にて行われた日本言語政策学会第19回大会第4分科会の中で「高等学校における第二外国語教育の現状—課題と提案」として発表した内容に基づくものである。

2. 高等学校における現状と第二外国語必修化の利点

2.1 大学に進学しない生徒たち

昨今、「高大接続」という視点からも高等学校(以下、高校と略す)での第二外国語教育の必要性が語られる。だが、大学教員の視点からは見落とされがちであるが、高校生の中にはそもそも大学に進学しない生徒も多くいる。日本の教育制度の中では大学に進学しなかった人には実際問題として、第二外国語を学習する機会ほとんどないというのが実情であろう。しかし、後述する例のように、むしろ場合によっては、そういった生徒たちこそ、高校で第二外国語を学ぶ意義は大きいと考える。

仮に大学ではなく、医療、看護、介護系の各種専門学校に進学するケースを考えてみよう。医療、介護の現場では、少子高齢化社会による労働力不足にともない、海外、たとえばフィリピンなどの看護師、介護福祉士を受け入れる傾向が、国策の影響もあり、近年強くなってきている。実際、筆者も日本語教師として、海外産業人材育成協会(AOTS)で行われているフィリピンやインドネシアからの看護師や介護福祉士に対する日本語教育に携わっている。こうした現状に照らせば、医療、介護系の専門学校に進学した生徒たちは、将来的に就業先で外国人労働者と関わる機会がより一層増えることが予想される。このような場合に、彼らを受け入れる日本人側に相手の国の言葉や文化などの知識が多少なりともあれば、双方にとって、そこは働きやすい環境となるであろう。そのような中で、お互いに作業効率の円滑化を図ったり、潤滑な人間関係を構築したりすることによって、労働環境をよりよく整備することにつながり、ひいては長期就業による労働力の安定確保にもつながる可能性があると考えられる。同様のことは、農業、林業、水産業、建設業などのさまざまな業種においても言えるであろう。

したがって、高校での第二外国語教育のさらなる導入と普及には、大学に進学する生徒を対象とする「高大接続」という視点と同時に、大学に進学しない生徒も視野に入れた、高校での職業訓練、カルチュラル・インテリジェンスの養成の一環としての第二外国語教育という観点も、今後必要になってくるのではないかと思われるのである。

2.2 生徒の立場から考える第二外国語教育の利点

2.2.1 日本人生徒の例

高校時代に第二外国語としてのスペイン語を学習した経験が、実際の職場で活かされたという日本人生徒の例を2例紹介する。

まずは、高校時代に部品工場での単純作業のアルバイトをした経験を持つ生徒の例である。その工場で働くパートを含む日本人社員全員が英語も他の外国語も全くできなかったそうである。にもかかわらず、工場のラインで働く作業員のほとんどがアジア諸国から来日した外国人であった。ある日、その外国人の一部の人たちの会話からスペイン語の単語を耳にし、その生徒が思い切って話しかけてみると、スペイン語圏の人ではなかったものの、フィリピン人であることがわかった。以前、スペインの植民地であったフィリピンではスペイン語の語彙がそのまま現地語として使われていることが多く、単語レベルであれば、スペイン語を学習した人間ならばすぐに意味がわかることも多々ある。

その後、その生徒は英語とスペイン語を交えて彼らとコミュニケーションをとるようになり、次第にその工場で働くフィリピン人の間で話題となり、歯医者への付き添いを頼まれるほど仲が良くなったそうである。そして、大人に頼られたことで、高校生の自分にも何かできるかもしれないという自信が芽生えたそうである。また、それだけでなく、フィリピンのいろいろな文化や習慣を知ることができ、その生徒自身は工場で異文化理解や異文化交流が進んだと喜んでいていた。

続いては、高校時代に1年間だけスペイン語を学習した生徒についてである。その生徒は高校卒業後、販売職に就いた。ある日、外国人夫婦が来店し、その接客をしている際に、会話の内容については理解できなかったが、スペイン語を話していることは想像できたそうである。そこで、思い切ってスペイン語で挨拶をしてみたところ、まさしくスペイン人だということがわかった。そのスペイン人夫婦は日本人従業員にスペイン語で挨拶をしてもらったことにすっかり気をよくし、たくさんの商品を買って行ってくれたとのことである。そして、その卒業生自身も大いに喜んでいて、さして一生懸命学習に取り組んでいたわけではなかったものの、これも高校時代にスペイン語を学んだおかげだと思ったそうである。

ここで重要な点はスペイン語で声をかけたことはもちろんだが、会話の内容はわからなかったにせよ、スペイン語を話しているということはわかったという点である。高校時代にスペイン語を学び、それが十分習得できていなかったとしても、何らかの形でそのことが記憶や経験として残り、活かされた典型的な例だと言えるのではないだろうか。

2.2.2 外国にルーツを持つ生徒の例

高校でスペイン語を学習している生徒の中には外国にルーツを持つ生徒もいる。外国を出自としながら日本で暮らす彼らにとって、たとえばアイデンティティの問題は切実である。スペイン語を学習することによって、その問題の解決に役立った生徒もいる。ここでは名前や出自など詳細は伏せて、外国にルーツを持つ生徒の例を4例紹介する。

最初はペルー人の親を持つ生徒についてである。その生徒はペルーで生まれ、3歳まで現地で育った。その後来日し、そのため高校入学時にはスペイン語は話せなかったが、スペイン語の名前は持っていた。母親は日本人だが、父親がペルー人で日本語があまり話せず、父親と少しでも多くコミュニケーションがとれるようにと、スペイン語科目がある高校を選び、スペイン語を学習した。その生徒は大学には進学しなかったが、高校在学中に一生懸命学習し、2年目も継続学習した。スペイン語学習を始めてから

は父親とのコミュニケーションの機会が増え、その中でも以前よりもスペイン語を使ったコミュニケーションが多くなり、非常に喜んでた。また、スペイン語学習を進めるうちにその生徒の中での意識が変わったのか、1年目の授業では自分のことを日本人としてスペイン語で自己紹介していたのだが、2年目になると、いつの間にか自らをペルー人だと言うようになった。

2 例目もスペイン語圏の親を持ち、小学生まで現地で育った生徒についてである。日本に来たころは日本語が全く話せず、苦勞したとのことだが、高校当時には逆にスペイン語は親と話すことで維持はしていたが、母語交代が起り、スペイン語の上達が止まってしまっていた。そういう状況であったため、自身のアイデンティティにも悩んでいた。高校に進学してスペイン語科目があることを知り、当初は選択するかどうかさえ決めかねていたようだが、本人の言葉を借りれば、中途半端な自分のままでいるのがとにかく嫌で、スペイン語科目を履修することにしたそうである。結果として自身のルーツを真剣に考えるようになり、スペイン語に対してのみならず、さまざまな意味で自信を深めていったようである。また、初めてスペイン語を体系的に学んだことによって、スペイン語力を向上させることにもつながった。

3 例目はスペイン語圏ではないが、フィリピンにルーツを持つ生徒たちである。彼らはスペイン語クラスでは一目置かれることが多い。先にも述べたように、歴史的経緯によって、フィリピンの現地語の中には、スペイン語の語彙が含まれている。それ故、日本語母語話者よりもスペイン語が理解しやすく、他の日本人の生徒たちから羨ましがられることがよくある。本人たち曰く、それまで‘ハーフ’であるということで、残念ながらあまりいい印象で見られてこず、中にはかつていじめにあった生徒もいたが、これを機に羨望の眼差しで見られ、自らの出自に対して誇りを持てるようになったようである。さらに、フィリピンにルーツを持つ生徒たちは、フィリピンの言葉や文化はスペインの影響を受けているからスペイン語が学びやすい、もしくは学んだほうがいと親から勧められて選択する生徒もいる。こういったレディネスを持った生徒がスペイン語クラスにいることは、スペイン語を学習する上で他の生徒たちに有利に働くとと言えるであろう。また、彼らとともにスペイン語を学ぶ日本人の生徒にとっても、フィリピンとスペインとに接点があることを知り得る機会になる。言語的側面だけでなく、文化的側面も似ていることが多くあり、スペインのこのことのみならず、フィリピンのことも学べるのである。

最後は中国にルーツを持つ生徒についてである。このケースは上記 3 例とは異なり、スペイン語自体が直接、日常の使用言語に関わってくるわけではないが、複数言語学習のモチベーションの一例として紹介したい。この生徒は高校入学時点ですでに、中

国語、日本語のバイリンガルで、英語レベルも高い生徒であった。その生徒の話によると、自身はその 3 言語がすでにできるので、他の外国語を是非、学びたいと考えたようである。スペイン語以外の外国語も選択肢にあったのだが、本人が言うには、中国語、英語に次いで母語話者が多いスペイン語が学べれば、世界のどこに行っても生きていけると考えたそうである。このように外国にルーツを持つ生徒の多くは、高校入学時にすでにバイリンガルであることや、英語をマスターしている生徒も多い。さらに、日本語環境の中だけで生活してきた生徒たちと比べると、外国語学習に対する苦手意識がほとんどなく、外国語学習に積極的である。このような生徒たちにとって、高校からすでに他の外国語が学べることは、有益であるのではないだろうか。

2.2.3 学習意欲向上へのメリット

高校生にとって高校で初習科目として第二外国語の学習機会があることは、それまでの英語学習への反省や、英語科目ではドロップアウトしてしまった生徒でも新たに外国語学習に再チャレンジする機会が与えられることにもなる。そのことで自信を取り戻す生徒もおり、ひいては高校生活や他教科に取り組む姿勢が好転することもある。

ここで重要なのは、初習外国語がクラス全体にとって、外国にルーツを持つ生徒や帰国子女などを除いて、ゼロスタートであるという点である。なぜなら、英語や数学などの基礎科目はすでに得意な生徒と不得手な生徒との間に大きく差がついてしまっており、不得手な生徒にとってはそれが苦手意識や劣等感となって学習意欲がそもそも低い状態にあると考えられる。したがって、既習科目の中では成績やモチベーションを含め、リカバリーが難しいというのが実情である。そのような時に、全員が横並びでスタートする科目があれば、優劣を気にすることなく新鮮な気持ちで学習に臨めるからである。

たとえば、中学時代に不登校気味でほぼ全教科の学習内容がところどころ抜け落ちた状態だったため、高校の授業についていくのが困難だった生徒がいた。ところが、高校から初めて習う科目があり、それが第二外国語としてのスペイン語だったのだが、初習科目であるということで、まじめに学習に取り組むことで自信をつけた。筆者がこれまでに携わってきた各高校では第二外国語は 2 年生からスタートするが、自信を持って取り組めるスペイン語科目があることで、それまでは休みがちだったのが、徐々に学校を休まなくなった生徒もおり、中には最終的に大学のスペイン語学科に進学を果たした生徒もいた。

2.2.4 生徒の立場から考える第二外国語教育の利点の総括

上述したこれらの例から見ても、高校時代にこのような第二外国語学習の機会があることで、人生を前向きに考えたり、異文化に対する柔軟性も培われたりしている。また、例でも挙げたようなアイデンティティの問題の解決は、自分が周囲の人間に認められるということ、認められたという実感を本人が得られることが何より重要であると考えられる。そうした観点からすると、クラスや学年単位での人間関係や結束が密な高校の教育現場の方が、人間形成という点から見て、大学以上にそうした効果を一層見込めるのではないかと考えられる。

2.3 制度、設備的側面から見る第二外国語教育の利点

高校は大学に比べ、他教科との連携も比較的図りやすい環境にある。現代文の時間にスペイン語圏に関する読み物を読んだり、スペイン語圏作家の作品に触れたりすることもできる。あるいは社会科であれば、歴史や地理、政治経済の分野で連携を図ることも考えられる。他にも、音楽や体育、家庭総合でも可能である。

設備面では、大学とは異なり、たとえば、音楽室や調理実習室などの特殊教室設備が整っており、また、それらの教室の使用許可もとりやすい。特に公立高校では、敷地面積から見ても、教室移動や教室変更が行いやすい。実際、筆者自身も家庭科と連携を図り、調理実習を行っている。

3. 高大接続の観点からの第二外国語教育の在り方

現状としては高校でスペイン語を履修して大学に進学したとしても、継続学習が困難なこともある。せっかく高校で、ある程度のレベルまで学習したにもかかわらず、進学した大学にスペイン語科目が設置されていなかったり、もしくは十分なクラス数が確保されておらず、抽選で漏れたりして学習機会が奪われている場合もある。教員不足や大学の運営上の問題などさまざまな要因が考えられるが、いずれにせよ、学生たちの学習意欲を損ねていることには違いない。

また、もし学習機会が与えられたとしても既習者向けクラスが未設置であったり、相応しい教科書がないために、結局は初習者と同等の扱いを受けざるを得なかったりする学生がほとんどである。そういった学生がクラスの中にいると、教員としても、どのように

対応すべきか戸惑ってしまう。退屈しているのではないか、そのことで学習意欲が減退しているのではないかと教員側は考えてしまう。当の学生は、自分のレベルに応じた継続学習ができれば、もっと先に進めるのにとと思うようである。スペイン語専攻の学生やスペイン語学習 2 年目の学生たちに取り残され、追い越されているのが何よりも悔しく感じるようである。

このような現状を克服するためにも高校で第二外国語が必修化されれば、当然大学側もそれを前提としたカリキュラムを設定し、受け入れ体制が整うことになるのではないだろうか。また、英語のように難易度を変えて同じ文法項目を何度も繰り返し学習するような学習指導要領が整備され、その指導要領に沿った教科書ができれば、高大が連携した効率的な継続学習が促進されると考えられる。現在のところ、高校での第二外国語指導要領は英語に準ずるとなっているが、英語教育の実情とスペイン語教育、及びその他の外国語教育の実情との間には大きな開きがある。英語教育においては、教授法が頻繁にブラッシュアップされていくのに対し、スペイン語教育では未だに以前のままの教授法がとられていることも少なくない。結局は需要と供給の問題、つまり、英語とスペイン語の現状におけるニーズの差なのであろうが、制度を整えば、教材、教員が変わるチャンスも生まれるであろうし、逆もまた然りである。スペイン語教育の現場でもアクティブラーニングと言われてはいるが、実際には教員自身が受けてきた授業を変奏しているに過ぎないと言っても過言ではない。その原因の一端は日本でのスペイン語教育のニーズに応じた新しいスタイルの教科書がほとんど見つからないことにあるようにも思える。筆者は『高校生のためのスペイン語』というテキストを上梓しているが、執筆の際にはタイトルにある高校生だけでなく、大学での初習者にも対応し得る内容となるよう心がけた。しかしながら、高校と大学双方に適応可能なテキストは未だ数が限られており、結果として、これまでと同じサイクルを繰り返さざるを得ないのであろう。この点に関しては、スペイン語に関わる業界全体で事態の改善に取り組んでいく必要があるであろう。

4. おわりに

以上、高校、大学どちらの現場も知る立場として、主に高校における第二外国語の必修化の意義と、それに基づいた高大接続の展望について述べてきた。今までと同様これからも、グローバル化という観点のもとに人材育成のための教育指針を打ち出していくのであれば、大学に進学する生徒だけでなく、大学に進学しない生徒に対しても十分なふり幅を持った、高大の垣根を越えた第二外国語教育のカリキュラムの整備

を今後一層真剣に考える必要があるのではないだろうか。

(大阪府立松原高等学校、関西学院大学)

On present situation and necessity for second language education at high schools

Midori TERAO

This report is based on the contents of panel session presentation at the 19th Japan Association for Language Policy, 2017. The present day situation and the advantages of second language education, with the emphasis on Spanish classes at high schools, are reported. It is also mentioned that the second language education at high schools might have to become a compulsory subject. In addition, some viewpoints on high school-university interaction are discussed.